

いのちの水

二〇一八年

二月号

六八四号

目次

- ・水仙 雪の白 (冬季聖書集会における講話) 3
- ・旧約聖書における復活 (1) 3
- ・旧約聖書における復活 (2) 5
- ・旧約聖書における復活 (3) 5
- ・新約聖書における復活 (1) 11
- ・魂の渴きと救い詩篇63篇 15
- ・神の言葉の権威ー夕拝の学びから 列王記上20、21章 19
- ・お知らせ



私はつねに主を前に置く。
 主が私の右にいますゆえ、私は動かされることがない。(詩篇16の8)

水仙

今はわが家の庭には水仙がちこちに咲いている季節ゆえに、たまたま目にした次の俳句が心にとどまった。

水仙を見て水仙に見られをり

このような経験は、多くの人を感じたのではないかと思う。単なる言葉の表現のおもしろさといったものでなく、じつさいに、万物を愛をもつて創造した神がおられることを信じ、いまもその神が、万物を支えていることを信じる時には、じつさいに、このように感じられてくる。

水仙に限らず、黙してたたずむ樹木とくに大木であったても、そのさまざまの風雨に

絶えた過去を見つめるとき、その堂々とした樹木が私たちに静かに語りかけてくる。夜空の星も同様である。闇のなかに汚されない光に輝き続ける星、それを見つめるときには、その永遠の光が私たちに語りかけてくる。

私たちは、苦しいとき、神を仰ぐ、祈る。そのとき、神もまた私たちを見つめてくださっているのをほのかに感じる。

私たちが神を仰ぎ見ていないときから、すでに神は私たちを見つめてくださっている。逆に、憎しみをもって相手を見るなら、相手もまた憎しみをもって見つめてくるのである。

人を傷つけても平気だというような悪しき人は、こちらが愛をもって心の目で見つめて

も、まったく変化もなにもない、ということが有りうる。

しかし、それでもなお、愛をもって見つめ続けるときには、相手の背後から神が私たちを見つめてくださる。

門をたたけ、そうすれば開かれるーこのキリストの言葉は、奥深い意味をなげかけている。

雪の白

冬は雪、その純白に 心惹かれる。

雪国では、雪というと多大な積雪のためのさまざまな難儀を連想される人が多いのではないかと思われる。

しかし、徳島のような南国にあっては、雪が降る日は少なく、雪というとその白さを思い浮かべ、雪景色の美しさを思う。

聖書の記された地方では、雪はさらに少なく、雪景色の美しさというより、その純白が

心に響いたのがうかがえる。

イエスの復活を告げる天使の衣は、雪のように白かった。

(マタイ福音書28の3)

神の使いとは、神の御性質の重要な特質を表している。それは、雪の白さにたとえられている。言い換えれば罪がないことである。罪とは表面的な悪い行動を意味するだけでなく、その行動の奥にある心の悪しき状態である。いいかえると、神のもっておられる純粋な愛や正義に背く心の動きを意味する。

そのようなことがまったくない状態は地上の人間にはありえない。

神の国に属するものだけがそのような完全な罪なき状態にあり、それゆえに天使は雪のように白いと表現されている。

…その頭、その髪の毛は、白い羊毛に似て、雪のように白く、目はまるで燃え盛る炎。

…「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持つている。」(黙示録1の14、18)

…ここでは、復活したキリストの頭や髪の毛が雪のように白いと言われている。

…六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、

服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。

(マルコ9の2、3)

…このように、イエスが近いうちに十字架にかけられることを知って、弟子たちを伴って

高い山に登ったときに、イエスの姿は、人間と思えぬ姿となった。その特質がここでも、服が真っ白に輝いたというこ

とで表されている。

三千年ほど前の人が、つぎのように書いている。

…ヒソブ(*)の枝によって私の罪を除いてきよめてください。

そうすれば、私はきよくなりましょう。

私を洗ってください。

そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。(詩篇51の7)

(*) 植物名。清めに用いられた。

このように、聖書の書かれたパレスチナ地方では雪は稀であり、それゆえにいっそう雪の白さは神の完全な清さ、罪がまったくぬぐい去られた状態を実感させるものとなっていたのがうかがえる。

人間世界は、汚れている。いかにしても清くなれない。この気持ちから、清くされることを求めない心になることも

よくある。

…この世では、清濁併せ呑むというように、不正なこと汚れたことも適当に暗黙のうちには認めていく姿勢がないといけない。嘔も方便といわれ、適当に嘔も必要だと考えている人もある。

…このような心では、ここにあげた詩の作者のような、雪のように白くしてくださいという切実な願いは生まれない。

求めよ、そうすれば与えられる。このキリストの約束は、このようなことにもあてはまる。

人間の努力や修養、知識、多様な教養、人生経験等々、いくら重ねても、心が、雪のように白く、罪からまったく清められることはない。

使徒パウロのような、もつとも聖霊を豊かに与えられたとみなされる人さえ、自分が欲していない罪をしてしまい、

しなければならぬことができない—この死のからだをどうすればいいの—と嘆いているほどである。

そのようなパウロにも、またそれ以後の無数の人たちに、雪のような白くされる道が与えられることになった。

それが、キリストの十字架を信じるという単純なことなのである。

キリストが私たちのそうした汚れ—罪ゆえに死んでくださったと、信じるだけで、私たちの罪は赦されて義とされる—言い換えると白くなったものとみなしてくださいというのである。

そして完全に白くされるのは、御前にて復活させていたのだとき、天の国においてそれはなされる。

冬の寒さのただなかに大空から舞い降りてくる雪、その白さに、はるか数千年前から、聖書の人たちは、神の国の罪なき聖なる白さを思い浮かべ、

またそのような状態を祈り求めていたのであり、じつさいに信仰によってそのような清さが与えられ、死後には完全な白さが与えられるようになったのである。

現代の私たちも、雪の白さに触れるときに、聖書におけるこうした記述、十字架による罪からの清められた状態を思い起こすようでありたい。

旧約聖書における復活

(その1)

復活というと、一般的には、キリスト以後のことだと思われている。しかし、新約聖書で重要な教えやその内容は、たいてい旧約聖書からすでにその源流が見られる。身代わりの死、隣人愛、神の本質が真実と慈しみということ、罪の赦しの重要性…等々。

それでは、復活に関する記述も旧約聖書にあるだろうか。まず、旧約聖書の冒頭に記さ

れている、闇と混沌のなかで神が「光あれ!」とのひと言によって光が存在するようになった。

そして、死とは、闇と空虚であり何も無いという状態だと言える。そのような中に、光を存在させた。その光は、単に物理的な光だけを意味するのではない。

後になって、ヨハネ福音書の冒頭において、ロゴスという言葉で表されたキリスト(地上に生まれる以前)は神ともあり、万物の創造もそのキリストによってなされた。

そしてそのロゴスという言葉で表されたキリストは、命があり、その命は人間を照らす光であった。(ヨハネ福音書1の2、3)

ここからわかることは、光あれ! という神の最初の言葉は、同時に「命あれ!」という内容を持つているということである。このように、この創世記巻頭の言葉は、死の世界から

復活を最初に指し示しているのである。

次の記述にも永遠の命—復活が暗示されている。

：エノクは三百六十五年生き

た。
エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった。
(創世記5の22、24より)

これは、人間は死んだら終わり、消えてしまふ。あるいは陰府(ヘブル語でシェオル)という暗い世界に行くといった考え方を越えて、死ぬことがなく、神のところへと引き上げられるということを閃光のように啓示されたのである。

このエノクのことは、後の世代にも強い印象を残したのは、つぎの旧約聖書の続編にある記述にも現れている。

：エノクは主に喜ばれて天に移され、後世の人々にとつて悔い改めの模範となった。(旧約聖書・続編シラ書44の16)(*)

…この世に生を受けた者のうち、だれ一人、エノクに並ぶ者はなかつた。彼は地上から天に移されたからだ。(同49の14)

(*) シラ書は、紀元前2世紀(8190~180頃)に書かれた旧約聖書の続編に含まれる書。旧約聖書の箴言と共通した内容を多く含み、現代の私たちにも有益な教えが豊富に記されている。新共同訳では90頁もの分量があり、当時の人がいかにこの書に記されている真の英知について強い関心をもっていたかがうかがわれる。

シラ書とは、ベン・シラクの書を簡略化した名称。ベンとはヘブル語で「息子」の意。シラクの子の書という意味。神を信じる人々の集会にて用いられるべき書という意味で「集会書」という名称も使われている。

(英語では、Ecclesiasticus) 新共同訳のシラ書の1章からが本文であり、ギリシャ語訳のうち、バチカン写本では、この書名は「シラクの英知」(ソフィア シラク sophia sirach) となっている。そしてシナイ写本やアレキサンドリア写本では、「イエスの子シラクの英知」(sophia iesou hyiou sirach) とより長い名称となっている。いずれにしても、本来のタイトルは、

「英知の書」という意味がもとにある。

旧約聖書の時代の人々は八百歳とか九百歳という信じがたいような年齢が記されている。しかし、いかに長寿であつてもみな死んだ。

そしてそのただなかに、エノクが天に引き上げられたことが記されている。ここに、長寿を超えた永遠の命、天に召されることの原型がある。

また、エリヤも、火の車で天に上つたと記されている。ここにも、人間はみな死んで空しくなつてしまふのでなく、逆に神のもとに導かれることが示されている。

じつさい、キリストが最後に近づいているときに、高い山に三人の弟子たちを伴つてのぼつたが、そのときに、現れたのがモーセとエリヤであつた。

そして、キリストは彼らと話しを交わした。このようなことも、旧約聖書の人物が死ん

で無になつたのではなく、眠っているのでもなく、復活して神とともに生きていたことを示している。

アブラハムもイサクなども、じつは生きていたとは、キリストが言われたことである。

イエスは、アブラハムの神、イサクの神、といつて、神は死せる者の神でなく、生きている者の神であると言われた。

このことは、多くのキリスト者たちも、あまり気に留めないうで読み過ごしていることが多いようである。

イエスの当時におけるユダヤ教の一派であつたサドカイ派の人たちは、復活などない、と断じていた。このような人たちに對してイエスは次のように言われた。

…復活の時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。

死者の復活については、神が

あなたたちに言われた言葉を讀んだことがないのか。

『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きていた者の神なのだ。』

(マタイ22の30~32)

イエスが言われたのは、当時の人たちも読み過ごしていた「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」ということに深い意味を与えたのである。

彼らはもちろん讀んだことはあつたが、そこに込められていた深い意味は読みとつてはいなかつた。そしてこれは現代の多くのキリスト者も同様ではないかと思われる。

アブラハムの神というとき、単にアブラハムが信じていた神、死んで無になつてしまつた過去の人間の神、という意味でなく、今も天の国において生きていたアブラハムの神なのだ、と言われたのである。だからこそ、イエスは死んだ

はずのエリヤやモーセとイエスは語り合うことができたのであった。

旧約聖書の時代には、ここに引用したような箇所はまだあまり知られていなかったようであり、一般的には死後に復活するという信仰はなかったし、そのような啓示もごく一部のひとにしかなされていなかった。

しかし、死後の復活を信じていることなくして、いかにしてゼアブラハムやモーセ、ダビデといった人たちが、あるいは預言書や詩篇を書いた人たちは満足できたのであろうか。

彼らは、詩篇にありありと記されているように、神の生きた言葉を受け、導かれていた。夜、床についても神との霊的な交流を豊かに与えられて、満たされていたのが次のような詩からもつかがえる。

： わたしは主をたたえます。主はわたしの思いを励まし

わたしの心を夜ごと諭してくださいませ。(詩篇16の7)

： 昼、主は命じて慈しみをわたしに送り
夜、主の歌がわたしと共にある。

わたしの命の神への祈りが。

(詩篇42の9)

そのように日々神の言葉を聞きつつ、それに従って導かれているときには、十分それで魂は満たされていたのだといえる。

神の言葉はいのちの言葉である。神からの語りかけを聞き、それに従って生きるときには、その神の言葉の命がいつも心にとどまることになり、それがすでに復活の命を生きているというほどであったと考えられる。

神の生ける導きがあれば、主とともにあれば、千年も一日の如し、一日は千年の如しであるからである。

そのことは、つぎの詩篇によく表されている。

： 主はわが牧者
私には乏しきことがない。
主は私を緑の牧場に伏させ憩いのみぎわに導かれる。

(詩篇23より)

主がわが牧者であるとは、生きた導きをしてくださったということであり、それは言い換えると、つねに語りかけてくださり、それを聞き取って従っていくという生きた交わりがなされているのを意味している。

そのような歩みは、つねに命を支え、生き生きた生となるのがよく表されている。

神の言葉は命の言葉であるゆえに、御言葉を日々受けている魂は、それは後にヨハネ福音書でキリストが言われたように、もはや死ぬことがないのを深く実感しつつ歩むことが可能となる。

旧約聖書における復活
ヨブ記、詩篇など(その2)

旧約聖書では、死後は無になつたり、陰府(ヘブル語ではシェオール)に行つて暗い地下のようなところにいると思われていた。

しかし、そうした一般的に何となく信じられていた、あるいは推測されていた伝承のようなどころに行くのではなく、神のおられるところー天に引き上げられるということも、エノクやエリヤのように折々に示されていたことは、前回に話したとおりである。

今回は、旧約聖書のうち、とくにヨブ記、詩篇などにおいてどのように、死と復活の命のことが記されているかを見てみたい。
まず、ヨブ記においては、次の個所がある。

： 神は一つのことによって語られ、

また、二つのことによって語られるが、人はそれに気がつかない。

人が深い眠りに包まれ、横たわって眠ると、夢の中で、夜の幻の中で

神は人の耳を開き、懲らしめの言葉を封じ込められる。

人が行いを改め、誇りを抑えこころして、その魂が滅亡を免れ、命が死の川を渡らずに済むよつにされる。

苦痛に責められて横たわる人があるとする。骨のうずきは絶えることなく、

命はパンをいとい、魂は好み、の食べ物をすらいとう。

肉は消耗して見えなくなり見えなかった骨は姿を現し

魂は滅亡に、命はそれを奪うものに近づいてゆく。

千人に一人でもこの人のために執り成し

その正しさを示すために遣わされる御使いがあり

彼を憐れんで、「この人を免除し、滅亡に落とさないでください。代償を見つけて来まし

た」と言ってくれるなら彼の肉は新しくされて、若者よりも健やかになり

再び若いときのようになるであらう。

しかし神はわたしの魂を滅亡から救い出された。

わたしは命を得て光を仰ぐ」と。

まことに神はこのようになさる。

人間のために、二度でも三度でも。

その魂を滅亡から呼び戻し、命の光に輝かせてくださる。

私の魂をあがなって墓にくださせなかった。

私の命は光を見ることができ

る。(ヨブ記33の14、30より)

復活とは死んだものに関して言われることが多い。しかし、

死んだと同様な状態から新たに命を与えられることも一種

の復活であることは、新約聖書でもさまざまの個所で見る

ことができる。

このヨナ書の個所にもほと

んど滅んだと思われる状況から、救いだされ、命の光に輝くよつにされること、死にうち勝つ力を神が与えられることが語られている。

詩篇における復活

詩篇においても、ヨブ記のよつに、滅びから、死の世界から救いだされることがいくつ

かの個所で示されていて、それは、キリストの時代によつて明確に復活が世界に示されることを指し示しているし、

復活ということについての預言となつている。

詩篇においてもそのような復活を指し示すことが記されている。

詩篇において、あなたは御計らいによって私を導き

後には、栄光へと私を取られる。(*) (導かれる。) (詩篇73の24)

You guide me with your counsel (**), and afterward

you will take me into glory (NIV)

(*) 「取る」ヘブル語では、ラーカハ。これは、976回も旧約聖書で用いられているごくふつ々の日常的な言葉である。

例えば、

・肋骨あばらほねの一つを取って肉でふさいだ。

・人を取って(連れて)エデンの園に置いた。創世記2の15

・その木から実を取って、アダムにも与えた。創世記3の6

(**) counsel は名詞で、「(熟慮の上での)助言、忠告」の意味なので、カトリックの代表的な訳では、adviceと訳されている。(New Jerusalem Bible)

地上においては、その愛をもつて、深い英知と御計画によつて私を導いてくださり、死後は、私を取ってその栄光の世界(天の国)へと導かれる

ということであるから、これは、創世記のエノクと同様なことが記されていて、復活を指し示す内容となつている。

次の個所も同様で、自分は、死でおわるものではないこと

が、確信をもって歌われてい

る。

…わたしは主をたたえます。
主はわたしの思いを励まし
わたしの心を夜ごと諭してく
ださいます。

わたしは絶えず主に相對して
います。

主は右にいまし

わたしは揺らぐことがありま
せん。

わたしは喜び、魂は躍り
ます。

からだは安心して憩います。

あなたはわたしの魂を陰府に
渡すことなく

あなたの慈しみに生きる者に
墓穴を見させず

命の道を教えてくださいます。
わたしは御顔を仰いで満ち足
り、喜び祝い

右の御手から永遠の喜びをい
ただきます。(詩篇16の7~11)

…

…の詩では、神は昼間ばかり
でなく、夜ごとに語りかけ、
教えてくださいます。そしてつね

に主を前にし、主がそばにい
てくださるといふことを日々
実感して平安のうちにある。

そこから、神の慈しみと真実
ゆえに、死という暗い世界、
いつさいの望みもないような
世界に落とすことはないとい
うことが、はっきりと示され
ている。

死の世界でなく、命の道、命
の世界を示され、そこに入れ
て下さるゆえに、永遠の喜び
を受けている。

生きているときに、日々神と
交わり、神の言葉を受けて生
きる者には、死後のことも神
のもとにとどまり続けるとい
うことがおのずから啓示され、
喜びのうちにおいていただけ
るのがわかる。

…彼らは陰府に定められた羊
のように死が彼らを牧する。
彼らはまっすぐに墓に下り、
そのかたちは消えうせ、陰府
が彼らのすまいとなる。

しかし神はわたしを受けられ
るゆえ、わたしの魂を陰府の

力からあがなわれる。

(詩篇49の14~15)

この詩においても、真実で慈
しみに満ちた神に従わない
言い換えると、偽りや憎しみ、
差別や暴力など、真実や慈し
みに真つ向からと反対のこ
とを意図的に続けるものに関
しては、確実に死が訪れる。

そして、それらいつさいがで
きなくなる闇と無の死の世界
へと落ちていく。

しかし、神に信頼する者は、
神が受けいれてくださり、死
の力からあがなない取ってくだ
さるのを啓示されていた。

…わが神、主よ、わたしは心
をつくしてあなたに感謝し、
とこしえに、み名をあがめま
す。

わたしに示されたあなたのい
つくしみは大きく、わが魂を
陰府の深い所から助け出され
たからです。(*) (詩篇86
の12~13)

You have delivered my soul

from the depths of Sheol.

(*) 「助け出された」新共同訳で

は、助け出される。と現在形に訳し
ているが、原文のヘブル語は完了形
であり、口語訳、新改訳なども、そ
して英語の数十種類ある訳もほとん
どすべて右のように、完了形で訳し
ている。新共同訳にはこのように、
ほかの大多数の外国語訳や日本語訳
と異なる訳しかたをしている個所が
しばしばみられる。

さらに、キリストが十字架上
で最期の苦しみのなか叫んだ
言葉は、そのまま詩篇22篇の
叫びである。

…わが神、わが神、なにゆえ
わたしを捨てられるたのか。
なにゆえ遠く離れてわたしを
助けず、
わたしの嘆きの言葉を聞いて
くださらないのか。…

あなたは私を死の地に置かれ
た。(詩篇22篇1~16より)

…

…のよつに、イエスの最期の
叫びと全く同じ叫びがすでに
イエスよりも1000年ほど昔

に体験され、記されているこ
とに驚かされる。

イエスの十字架上で叫びは、
詩篇が預言していたというこ
とになる。それは言い換える
と、神が詩篇の作者を用いて、
はるか後のキリストの叫びを
予告したということもいえる。
そしてそれだけではない。こ
の詩篇には、このような死の
迫る状況から一転してつぎの
ような記述が続いている。

： わたしは兄弟たちに御名を
語り伝え

集会の中であなたを賛美しま
す。
主を畏れる人々よ、主を賛美
せよ。

ヤコブの子孫は皆、主に栄光
を帰せよ。

イスラエルの子孫は皆、主を
恐れよ。

主は苦しむ人の苦しみを
決して侮らず、さげすまれま
せん。御顔を隠すことなく
助けを求める叫びを聞いてく

ださる。

地の果てまで

すべての人が主を認め、御も
とに立ち帰り
国々の民が御前にひれ伏しま
すように。

王権は主にあり、主は国々
を治められる。

命に溢れてこの地に住む者は
ことごとく

主にひれ伏し
塵に下った者もすべて御前に
身を屈める。わたしの魂は必
ず命を得

子孫は神に仕え
主のことを来るべき代に語り
伝え

成し遂げてくださった恵みの
御業を

民の末に告げ知らせるである
う。(詩篇22の23～32より)

このように、キリストの最期
の叫びにもそのままの言葉で
見られるほどに、この詩篇22
篇の作者の苦しみは絶望的状
況であった。

しかし、それにもかかわらず、
ここにあげた後半の22節以降
は、まったくその内容が変容
している。

それは、その深い闇と死の世
界から救いだされた人の、深
い喜びと賛美があり、その大
きな救いの体験ゆえに、周囲
の人たちに、そして世界の国々
にこの喜びを伝えたいとの気
持ちがあふれている。

まさに、この詩の作者は死か
ら生への復活をとげたのであつ
た。

： わたしの魂よ、主をたたえ
よ。

わたしの内にあるものは、み
んなで

聖なる御名をたたえよ。

わたしの魂よ、主をたたえよ。
主の御計らいを何ひとつ忘れ
てはならない。

主はお前の罪をことごとく赦
し

病をすべて癒し
命を墓から贖い出してくださ

る。慈しみと憐れみの冠を授
け

長らえる限り良いものに満ち
足らせ

驚のような若さを新たにしてい
てください。(詩篇103の1～5)

神を賛美する心、それはこの
詩にあるように、罪を赦し、
病をもいやし、命を死の世界
から引き出してくださる。

そして神の愛を注ぎ、新たな
力を与えてくださる。

このように、詩篇はさまざま
の個所において、死の力から
救いだす神の力を知らされ、
賛美し、あるいはじつさいに
その命を体験していることを
証している。

そして、詩篇だけでなく、預
言書においても復活という重
要な真理は預言され、あるい
は証しされている。

： 荒れ野よ、荒れ地よ、喜び
躍れ

砂漠よ、喜び、花を咲かせよ、野ばらの花を一面に咲かせよ。： 荒れ野に水が湧きいで、荒れ地に川が流れる。(イザヤ書35章より)

このような、雄大な語りかけは、砂漠という水なき大地、死の大地にもいのちの水が流れ、命が復活し、ゆたかな花を咲かせるといふことを通して、人間の死せる状況においても、神からの命の水が注がれるならば、花開く、新たな命に復活することが含まれている。

次に、旧約聖書のヨナ書についてみてみよう。ヨナは、神からの言葉を受けたが、聞くこともせず、すぐにそこから逃げて行った。神が呼び出される人にはこのように実にさまざまである。モーセやエリミヤも、自分は神の言葉を語るなど、そのようなことはとてもできない、耐えられない

と強くしり込みした。

しかし、神が強く彼らに迫って行ったゆえに、彼らは神の言葉を語る指導者、預言書とされていった。

ヨナは、神に反論とか哀願することなく、ただちに当時は世界の西の果てとみなされていたスペインのほうまで、船にのって逃れようとした。

しかし、途中で船が激しい嵐に遭遇し、船は海に呑み込まれそうになって死に瀕することになった。そのなかで、そうした原因はヨナが神の言葉から背を向けて逃げ出したからだと判明し、ヨナはそのことに深く悔い改め、自分を海に投げ込めと水夫たちに言った。そして逡巡する水夫たちもいよいよ暴風と荒波に呑み込まれそうになったとき、ヨナを海に投げ入れた。すると海は静まった。

ヨナは、大きな魚に呑み込まれ、ふつうなら当然死んでしまっただったが、驚くべき神の力がヨナに働いたのだった。

さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。

ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて言った。神、主に祈りをささげて言った。苦難の中で、わたしが叫ぶと主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めるわたしを聞いてくださった。

あなたは、わたしを深い海に投げ込まれた。地はわたしの上に永久に扉を閉ざす。

しかし、わが神、主よあなたを命を滅びの穴から引き上げてくださった。

息絶えようとするときわたしは主の御名を思い起こした。

わたしの祈りがあなたに届き聖なる神殿に達した。： 救いは、主にこそある。

(ヨナ書2章より)

ヨナは、その大魚のなかで死を覚悟した。まさに息絶えようとするとき、神を思い起こし、神に必死で祈った。死の世界から救いを求めて叫んだ。神はヨナの全身全霊を込めた祈り、叫びを聞かれ、救いだされた。

これは、単なる子供向けの物語ではない。

神は全能であるゆえに、長い歴史のなかでその無限の英知による御計画によってなそうとされるなら、人間のふつうの常識的なことを越えてなすことができる。こうした奇跡ができないなら、神は全能ではないということになるからである。

そして、キリストは、復活という最も重要なこととするしとして、このヨナの大魚に呑み込まれて三日三夜のうちに、事実上死んだようなところから救いだされたことを用いられた。

復活などないと主張するユダ

ヤ人のサドカイ派やパリサイ派の人たちからの攻撃に対して、イエスが言われたのは、教えや説得、議論でなく、意外なことにこのヨナ書に記されていることであった。

… 邪悪で不義な時代は、しるしを求めろ。

しかし、ヨナのしるしのほかには、なんのしるしも与えられない」。(マタイ16の4)

ヨナが三日三夜、大魚のなかにあつて死んだような状態に置かれた後、神の力によって救いだされた。それがイエスが三日目に復活したことの、唯一のしるしなのだと言われた。

この一見とても信じがたいようにみえるヨナ書の記述が、十字架によるあがないと並んで、復活というもつとも大切なことを預言していると言われたのである。

主イエスは、このヨナに起こつ

た出来事を、いかに重要視していたかがこうしたことからうかがえる。

このように、創世記巻頭から、光あれ！ という言葉にも命あれ！ という意味が込められており、最初から、闇と混沌からの復活の力を預言的に指し示していた聖書は、その長い歴史のなかで、さまざまの力を起こして死にうち勝つ命の力、復活ということを指し示し、証ししていたのである。

深いところを流れる地下水が、折々に地表にあらわれて泉と なって湧き出るように、ヨブ記や詩篇、預言書等々には、そうした復活というきわめて重要な真理が、深い真理の流れからおりおりに湧き出てこの世をつるおしていたのであった。

そしてその後、ユダヤ民族にとって大きな試練、艱難のときが訪れた。それは、エジプトでのきびしい迫害やアッシリア、新バビロニア王国によ

る攻撃と滅びなどとともに、危機的な迫害が訪れることになったが、そのときには、こうした復活ということの真理の流れははつきりと歴史の表面に現れ、神の民を鼓舞することになったのであった。

それは、旧約聖書続編のマカバイ記、そしてそれと同時代のことを記した旧約聖書のダニエル書に見ることができ、紀元前170年ころに、シ

リアの王安ティオコス・エピファネス四世が、ユダヤの国を支配し、厳しい迫害を加えた。そのときの記述が、旧約聖書の続編のマカバイ記に詳しい。

律法に従おうとするユダヤ人を徹底的に迫害し、拷問し、律法を焼いた。

ユダヤ人が豚肉を食べないと律法に従っていこうとする者を捕らえ、大鍋、大釜を火にかけ、舌を切り、頭の皮をはぎとり、体のあちこちをそぎ

落とした。そのあげくに焼き殺した。

そのようなときに、殺される直前に彼らが言ったのは次のようなことだった。

… 主なる神が私たちを見守り、真実をもって憐れんでくださる。モーセが『主はその僕を力づけてくださる』と明らかに語っているように」。

また別の者は拷問にかけられて死ぬ直前に、そのシリア王にこう言った。

「あなたは、この世から我々の命を消し去ろうとしているが、世界の王(神)は、律法のために死ぬ我々を、永遠の新しい命へとよみがえらせてくださるのだ」

さらに、もう一人の者も次のように言った。

「たとえ人の手で、死に渡されようとも、神がふたたび立ち上がらせてくださるといふ希望をこそ選ぶべきである。」

そして彼ら殺されていった若

者の母親は、そのような恐ろしい死を迎えようとする息子たちに次のように言った。

「人の生死を支配し、あらゆるものに命を与える世界の創造主は、憐れみをもって、霊と命をふたたびお前たちに与えてくださる。それは今ここで、お前たちが主の律法のためには命をも惜しまないからだ。」(マカバイ記7章より)

このような激しい迫害のなかで、マカバイと呼ばれたユダは一部の勇氣あるものたちと共に、立ち上がった。そして神の力によって最終的に勝利した。その記録が、旧約聖書続編のマカバイ記である。

この書は前述のように、キリストの時代より175年ほど昔から10年余りの時代の状況が記されていて、キリストの時代に近づくとときには、このように、死者は復活するのだという信仰を見ることがで

きる。

その時代に記された旧約聖書の書物が一つある。それがダニエル書であり、それは黙示録のように、わかりにくい記述がいろいろとある。ともに厳しい迫害のなかで書かれた書である。

ダニエル書にも、マカバイ記と同じアンテオコス・エピファネス四世の迫害の時代であるので、復活の記述がある。

その時まで、苦難が続く国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。

しかし、その時 お前の民、あの書に記された人々は救われる。

多くの者が地の土の中の眠りから目覚める。

ある者は永遠の生命に入りある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。

目覚めた人々は大空の光のように輝き

多くの者の救いとなった人々

は
とこしえに星と輝く。(ダニエル書12の1〜3より)

ダニエル書は、バビロン捕囚のときの時代から、ユダヤの人々に激しい迫害を加えたアンテオコス・エピファネス四世の死にいたるまでの400年にわたる歴史がその内容に含まれている。

冒頭にバビロンの王の時代のこととして記されているが、ダニエル書の多くの内容は、とくに、アンテオコス・エピファネス四世のユダヤ人に対する迫害に関連して、神の大きな御計画が背後にあることが記されていて、世の終わりの状況まで記されている。

この書の重要性は、主イエスご自身も世の終わりのときの状況を、次のダニエル書の表現を用いたことからもうかがわれる。

…人の子のような者が天の雲に乗り、

神から権威、王権を受けた。彼の支配は永遠に続き、

その統治は滅びることはない。(ダニエル書7の13〜14より)

こうしてキリストの言葉にも現れるような真理を啓示されていたが、それはまた復活の真理がはっきりと啓示されたことにもつながっている。

このように、復活という重要な真理は、世の終わりのときに来られるキリストのこと(再臨)とともに、ダニエル書に示されている。

それは、言い換えるなら、ダニエル書やほかの詩篇、ヨブ記などの復活に関する記述は、すべてキリストを指し示しているということが出来る。

新約聖書における復活

(その1)

新約聖書において復活はどのように記されているか。復活は、単にキリストの復活だけでなく、信徒の復活、そして生きているときにすでに与えられる復活の命、永遠の命、さらに、この宇宙全体の復活ということまで、新約聖書の全体にわたってさまざまに記されている。

その復活に関することを、二回にわたって記したい。

まず、福音書のなかで、キリストご自身が、復活については、次のように明確に繰り返している。

…イエスは、御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け

始められた。(マタイ16の21、ほかにも17の23、20の19など)

キリストは、生きているときになされた病者や苦しむ人たちを救うこと、また山上の教えなどに見られる数々の真理の教え―その過程で受ける迫害、そして十字架における死、そして復活…このことは、すべて神から直接に知らされていたのであった。

「キリスト教」という言葉は、中国語の訳語をそのまま用いているのであって、この言葉では、「教え」がキリスト教といわれる信仰の内容の実体であるように受けとられる。

しかし、キリスト教信仰の内容の実体は、ここにあげたキリストの言葉が指し示すように、キリストが十字架で人間の罪を担って死ぬこと、そして神の全能の力によって復活したこと、信じる者には罪赦され、死にうち勝つ復活の力が与えられるということが中

心となっている。

そして、このように重要な十字架と復活のときに、そばにいたのが、意外にも男性の弟子でなく女性の弟子であったことは、キリスト教の真理の世界における女性の重要性を暗示するものとなっている。

(マタイ27の55～56、マルコ15の40～41、マタイ28の1～10、ルカ24の1～10、ヨハネ20章など)

とくにマグダラのマリア(*)は、七つの悪霊につかわれていた女であると記されているが、それは絶望的な精神的な病の状態であったことが推察される。その女が、キリストの十字架の処刑に際しても最後まで見守っていたこと、また復活というきわめて重要な出来事の最初に出会った人として記されている。しかも、この女性は、四つの福音書においてすべて復活のキリストと出会った最初の人として記され

ていることに、いかに初代のキリスト者たちにおいて深い印象を残したかがうかがえる。

(*) マグダラのマリアに関する特別な印象は後代においても続いていて、復活という重要な記述を聖書において読むときには、つねにマグダラのマリアのことも同時に連想することになった。

なお、マグダラのマリアは、フランス語では、マリー・マドレーヌという。フランス語のマドレーヌとは、ラテン語のマグダラ Magdalaene から、フランス語にも同じ語が入り、その後、フランス語では、Mageline、Mageline (マドレーヌ) という変化形となつて、女性の名前として広く用いられるようになり、その名をもつた女性がつくつたお菓子の名前ともなつて知られている。こうした現象も、マグダラのマリアに対する特別な印象が福音書の4人の著者たちに刻まれ、その名前という形であるにしてもマグダラのマリアのことが世界に波及した一例だといえる。

次に使徒たちの信仰とその行動を記した使徒言行録においては、復活したキリストが40日にわたつて弟子たちに現れて、神の国について話された。

しかし、40日もの間語り続けられたにもかかわらず、そのときに話されたことは、次のただ一つの内容にしばられている。

…前に私から聞いていたことー父(神)の約束されたものを待ちなさい。

ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなた方はまもなく、聖霊による洗礼を授けられるからである。(使徒言行録1の4、5)

私たちとしては、復活のキリストが40日にもわたって語られたことが何であったのか、知りたいと思う。しかし、神はあえてそのようなことは記さず、ただ一つのこと、ー復活したキリストが与えるのは、聖霊であるーということがあった。それがいかに重要なことであるかを指し示すことになった。

キリストを裏切り、逃げてし

まった使徒たちは、その罪赦され、新たに聖霊を受けた。彼らが、宣教をはじめたときの、メッセージの中心が復活だった。

イエスを計画的に売り渡したユダは、そのさばきを受けて死んだ。そのユダの代わりに使徒を決めるさいに、「いつモイエスとともにいた人の中から一人を選び、主の復活の証人になるべきだ」(使徒1の22)と記されている。

このように、キリストを宣べ伝えるということは、キリストの復活を宣べ伝えることであつたのがわかる。

さらに、聖霊をあふれるばかりに受けた使徒たちは、それが旧約聖書のヨエル書に預言されたとおりであつたことをのべ、力強く宣教をはじめた。その最初のメッセージの内容は、次のようであつた。

…神はイエスを死の苦しみから解放して、復活させられた。

イエスが死に支配されたままでいるなどは、あり得なかつたからです。…

神はイエスを復活させられた。私たちはみなそのことの証人です。(使徒2の24)

このように、使徒たちによるキリスト宣教の最初の出发点にあつたのは、キリストの隣人を愛せよとか、悲しむ人たちは幸いだといった教えでも、十字架のあがないでもなく、単純にキリストが復活した、という事実を証言することであつたのである。

このことは、キリスト教信仰はいかに事実を重んじる宗教であるかを示すものである。哲学や思想、あるいはさまざまの考えや研究というものでもない、復活したことを現実に体験したそのことをただ証しするーという驚くべき単純さが中心にあつたのである。

この復活を証したということは、ほかにも次のように繰

り返し記されている。

…ペテロとヨハネが民衆に教え、イエスに起こつた死者のなかからの復活を宣べ伝えているので、…二人の語つた言葉を聞いて信じた人は多く、男だけでも五千人ほどになつた。(使徒4の3、4より)

…使徒たちは大いなる力をもつて主イエスの復活を証しし、人々から非常に好意を持たれていた。(使徒4の33)

…神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前にあらわしてくださつた。…そしてイエスはお自分が生きている者と死んだ者とを裁く者として、神から定められていることを、人々に宣べ伝え、力強く証しするようにと命じられた。イエスについて、この御方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しを受けられる、と証ししています。(使徒10の

40〜43より)

そして、12使徒たちより後からキリスト者となったパウロも、聖霊に送り出されて異邦人への伝道へと出発した。そのパウロが最初に会堂に入って語ったメッセージは次のようであった。

…イエスについて書かれていることがすべて実現した後、人々はイエスを木から降ろし、墓に葬った。しかし、神はイエスを死者の中から復活させてくださった。…私たちもあなたの方に福音を告げ知らせています。つまり、神はイエスを復活させて、私たち子孫のためにその約束をはたしてくださった。…

神が復活させたこの方(イエス)は、朽ち果てることがなかった。

だから兄弟たち、知ってほしい。この方による罪の赦しが告げしられ、あなた方がモー

セ律法によっては義とされなかつたのに、信じる者はみな、この方によって義とされる。

(使徒13の29〜39より)

この個所で、初めて「信じるることによって義とされる」という福音が告げられた。

この後も、パウロは、アテネ

の哲学の愛好者たちの多いところでもイエスと復活についての福音を伝えていた。(使徒17の18)

そして後に捕らえられたとき、総督フェリクスの前でも次のようにのべた。

…彼らの中に立って、「死者の復活のことで、私は今日、あなた方の前で裁判にかけられているのだ」と叫んだだけなのです。(使徒24の21)

以上のように最初のキリストの使徒たちの宣教においては、まずキリストの復活ということとを証しするという単純なこ

とが中心にあり、それから、キリストによる罪の赦しの福音も合わせて語られるようになっていったのである。

そして、その代表的な著作といえるローマの信徒への手紙においては、復活と十字架による赦しとがともに強く語られている。

キリストが私たちの罪をになつて死んでくださったと信じて義とされる。(ローマ3章、21)

そして、救いを得て魂の平安を与えられ、聖霊が与えられる。(ローマ8章1〜17)それは、「キリストが死者の中から復活されたように、私たちもまた新しい命に生きるためである。…

自分自身を死者の中から生き返つた者として神にささげなさい。…」

…(神の)霊があなた方のうちに宿っているなら、キリストを死者から復活させた方は、あなた方の死ぬべきはずの体

をも生かしてください。(ローマ6の4、13、8の11より)

そして、よく知られた復活のことを詳しくのべた個所で、つぎのように書いている。

…もっとも重要なこととして伝えたことは、キリストが私たちの罪のために死んだこと、そして復活したことである。

キリストが復活しなかつたのなら、私たちの信仰は空しいし、あなた方の信仰は空しく、いまなお罪の中にあることになる。(コリント15章より)

このように述べて、十字架による罪の赦しと復活は不可分に結びついていることが強調されている。

現代の私たちにおいても、罪の赦しを与えられてはじめて、新たな命を知らされる。それは死んだような者が、復活したということができるほどの決定的な変化である。

それはキリストの12弟子たちや、使徒パウロにおいても同様であった。彼は、豊かな啓示を受けたゆえに新約聖書の多くの内容となったほどである。

私たちも、毎日の生活のなかで、罪深き自分の罪を十字架のキリストを仰ぐことよって日々赦され、そこから新たに聖霊を受けて霊的な復活が日々なされていくようでありたい。(次号に続く)

魂の渇きと救い

― 詩篇第63篇

神様、あなたは私の神。

私はあなたを捜し求め

私の魂はあなたを渇き求めます。

あなたを待って、私のからだ

は
乾ききつた大地のように衰え

水のない地のように渇き果て

ています。(2節)

2節からのところでは詩篇の中でも特に、信仰の末、神様との関係が非常にクリアに内面を浮かび上がらせている、数少ないものに入る。

渇くというのがこの詩の出発点になっている。詩篇の特徴は深い渇きを持っているという点である。人間は誰でも何かにある種の渇き、熱望をもっている。

一般の動物も、まず食物を求め。こどものときに、鶏を飼っていて、日中はしばしば放し飼いにしていた。夜には小さなニワトリ小屋に入る。

そうして一日の状態を観察しているとき、ときどき休んでいることはあっても、朝から日の暮れるころまで、一日中何か食物を探している。

人間もその点では食物に対する渇きは第一にあるので、戦後数年はとくに食べ物がなかった。そのころは、バナナはと

ても高価なものだった。また卵さえなかなか買えない状況だったので、四才か五才頃の節句の時に、1時間以上山を越えて行った海岸で食べたゆでたまごが非常に美味しかったことを今でも覚えてい

る。その頃、戦争映画がよくあり、父に連れられて見た映画では、飢えて食べ物が見つかった焼け野原で、人々がよろよろと歩いてきたとき、横切ろうとしていた一匹のヘビにその人たちが群がっていった光景をい

まだに覚えている。へびさえ食べたいというほどに食物がなかったのである。

その他、動物にない渇きを人間は持つていて、母親が居ない場合は、母親に対する渇き、友達や居ない場合には、友達に対する渇きがある。また上に立ちたい、権力、支配したい、それからお金への渇きもある。

そうしたさまさまの渇きのなかで、最も深い渇きは愛に

する渇きである。全く愛されなければ、人間は生きていけず、精神的にも肉体的にも衰えていく。

それが人間の愛、何かあるとすぐに変質したり消えてしまふようなものであっても、何かそうした愛の影でもなければ、生きていけないほどである。

このように誰でもが至る所で渇きを持っているが、共通しているところはどこか満たされないということである。

人間に特有な渇きがある。それは、愛、真実、正義、清い…等々への願いであり、求めである。そうした人間の特有な渇きを満たしてくれるものとして神様がある。

ここにあげた詩の出発点は、人間はさまさまなものに渇きの対象を持つていけるけれど、それらを満たしてくれるのが神様という事で、神を必死になつて求める。この詩を見て、

私たちは神様に対してこのよ

うな強い渇きと求めを持って
いるのかということである。

キリスト者になっても、さま
ざまな欲へと引つ張り降ろそ
うとする力が働くが、そうし
た誘惑にもかかわらず、キリ
ストをこのように求めていこ
うとするのが、現在のキリス
ト者としてのあるべき姿だと
知らされる。

キリストは、「義に飢え渇く
ものは幸いである」と言った。
義(正義)の根源は神であり、
神を基準として見るときには、
自分の中には、本当に正しい
ものはない、世の中にもない。
そこから、自分の中にどうか
正しいものを、もたらしてく
ださい、と願う心、あるいは
罪が清められて義とされる、
罪への赦しを求める心もまた、
義への渇きである。

クリスチャンでも神への渇き
がなくなったら、本当の信仰
者でなくなつたということに
なる。神への切実な渇きが日々
あるときには、神の霊的なも

のをいつも求めて、それを受
ける。そうした神に対する強
い渇きが、私たちの信仰が絶
えず生き生きとしたものであ
るためには不可欠なものだと
いえる。

この世的に恵まれた状況が続
くと、そうした渇きがなくな
る。ペトロのような聖霊を豊
かに注がれたような人でも、
エルサレムのキリスト教の集
まりで、割礼のものを恐れて
無割礼の者と一緒に食事をし
なくなつた。(ガラテヤ2の11~14)
夢に神様が現われて、異邦人
だからといって汚れていると
言つてはいけなはいとつきり
と示されたのに、渇きを持た
なくなつて、ゆるんでしまつ
たら逆戻りすることもある。

ダビデは、当時のイスラエル
のサウル王に追われて殺され
そうになつて苦しんでいた時
には、神への強い渇きがあつ
たから、詩篇の中でもそのよ
うな切実な神への叫び、祈り
がしばしばみられる。

ここにあげた詩篇63篇も、
その前書きに「ダビデがユダ
の荒れ野にいたとき」とある
ように、そうした状況につく
られたものとして伝えられて
きた。

私たちもまた、人生の荒野に
おかれたとき、人間にも頼る
ことができず、だれにもその
苦しみや悲しみを分かつても
らうこともできない状況にお
かれるときには、神への切実
な訴え、祈りが生まれ、心の
なかで神に叫び続けるような
状況におかれる。

しかし、ダビデにおいては、
時の経過とともにそのような
苦しい状況を通り越して、自
分が王になり、周囲一帯を平
定して、安楽な生活となつた
ときに、神への渇きが薄れて
しまつたゆえに、女性に対す
る欲望が強まつて重い罪をお
かしてしまつた。

「求めよ、そうすれば与えら
れる。」(マタイ福音書7の
7)このキリストのよく知ら

れた言葉は、すべての人たち
に対して言われている。

そして、そのように飢え渇く
魂に対して、その渇きをいや
し、深く満たすものがある。

この水を飲む者はまた、渇
きを覚える。しかし、私が与
える水を飲む者は、決して渇
かない。私が与える水はその
人のうちで、泉となり、永遠
の命に至る水が湧き出る。
(ヨハネ福音書4の13~14よ
り)

このキリストの約束以前に、
すでに預言するように、この
詩では、渇きのなかからの切
実な求めには、必ず神が応え
て下さり、ほかのものでは決
して満たされない魂の満足を
与えてくださることが記され
ており、この詩は、そのこと
を預言しているということが
できる。

この詩の作者はこのように求
めたからこそ、3節からある

よつに、よきものが与えられた状態が書かれていて、そこからおのずと神を賛美するようになって。与えられたもので満たされた。

3 今、私は聖所であなたを仰ぎ望み

あなたの力と栄えを見ています。

4 あなたの慈しみは命にもまさる恵み。

私の唇はあなたをほめたたえます。

5 命のある限り、あなたをたたえ

手を高く上げ、御名によって祈ります。

6 私の魂は満ち足りました

乳と髓のもてなしを受けたように。私の唇は喜びの歌をつたい

私の口は賛美の声をあげます。

6 節のような表現は今日の私たちには全くしないが、髓とは栄養的に最も優れているもの

で、魂がもつともよきものを受けたというこの象徴的表現である。

このように真剣に求めたから、最高のものを受け、賛美の声をあげるようになった。神様はそのときの社会的状況や政治的状況、年齢や教養などに関係なく与えられる。渴き求める気持ちさえあれば。

キリスト教の礼拝や集会でも何を求めて参加しようとするのか、神様を求めずに、単なる人間的な交流のようなものを求めたら、決して霊的な深いものは与えられない。

主イエスも、「私の名によって集まるところに私はいる」と約束されている。イエスの名によって集まるとは、キリストの本質的な愛や真実、永遠の命といったものをもとめて集まることであり、そのとき、キリストがその集りにいて下さる。

そして、キリストとはまた聖霊でもあり、御言葉そのものでもあるから、そのような心で参

加する者には、聖霊といのちの言葉である神の言葉が与えられる。

7 床に就くときにも御名を唱え

あなたへの祈りを口ずさんで夜を過ごします。

8 あなたは必ず私を助けてくださいます。

あなたの翼の陰で私は喜び歌います。

9 私の魂はあなたに付き従

あなたは右の御手で私を支えてくださいます。

7~9 節は、求めに応じて与えられたことを、また別の表現で言っている。

昔は電気さえなかったから、夜が本当に長かった。その夜をこの詩を書いた人は霊に満たされた過ごし方ができた。神様は助けてくださる。現実の生活において、霊的に満たされるだけでなく、実際に敵や困難から

支え助けてくださる。この詩は魂がいかに深く満たされるかというのを他の詩ではあまり見られないほど、豊かに表現されている。私たちクリスチャンの霊的生活もこんな風に満たされたらと願う。これほどに満たされたら、人のことを悪く言ったり、おとしめたりすることが自然になくなってくるであろうから。

10 私の命を奪おうとする者は必ず滅ぼされ

陰府の深みに追いやられる。

11 剣にかかり、山犬の餌食となる。(*)

(*) 新共同訳では、「陰府の深みに追いやられますように。山犬の餌食となりますように」という祈りとして訳されている。しかし、口語訳、新改訳、関根正雄訳、カトリックの重要な訳であるフランシスコ会訳、等々は、いずれも、ここに訳したように、必然にそうなる、という意味で訳されている。口語訳をあげてみよう。...しかしわたしの魂を滅ぼそうとたずね求める者は、地の深き所に行き、

つるぎの力にわたされ、山犬のえじ
 きとなる。(口語訳)
 外国語訳も同様で、例えば英
 訳やドイツ語訳(A TDも含
 め)の大多数はそのように訳し
 ている。プロテスタントの代表的な
 訳であるNew International Version
 New Revised Standard Versionなど
 もそのように訳されている。
 They who seek my life will be
 destroyed;
 they will go down to the depths of
 the earth. (NIV) (KRSもほぼ同様な
 訳)
 日本語としては、滅ぼされますよう
 にという「祈り」と、必ず滅びるとい
 う「未来への確信」とは、かなりニ
 アンスが異なる。
 なぜこのように異なるニアンスに
 訳されるのかといえば、原文は、未完
 了形であり、このように未来のことを
 確信して言うときにも、また未完了と
 いう用語のように完了していないこと
 をあらわすので、未来のことを祈る状
 況の場合にも用いられるということか
 ら、この新共同訳の訳者は、祈りとし
 て訳した。

けれども、多数はやはり、悪の迫り
 くる状況においても、必ずその悪は滅
 びるといふ神の力への確信を言ってい
 ると受けとっている。悪の力が必ず滅
 びると確信するからこそ、その悪がす
 みやかに滅びるよようにとの祈りも伴っ
 といえる。

9節までで、この詩の作者は、
 いかに神様が愛と真実の、しか
 も豊かな満たしを与えるかをと
 いうことを深く体験したのがわ
 かる。そのような神の愛を人生
 の長い経験のなかから学んでき
 た人は、またそのような神の真
 実や愛に敵対視、それを滅ぼそ
 うとする闇の力がこの世に存在
 するのをも直感的に深く知って
 いる。

それだけでなく、そのような
 力が時至れば、必ず滅ぼされる
 という確信を与えられている。
 その確信があるからこそ、ま
 たそのような悪の力が迫るとき
 それが滅ぼされるよようにという
 自然な願いが生まれる。

キリストが12弟子たちをこの
 世につかわそうとするときに与
 えた力とは、そのような悪の霊
 を追い出す権威、力であった。
 (マタイ福音書10の1、8)

神の愛や真実を全面的に否定
 し、悪をなしてもさばきはな
 いなどという力がこの世界で数々
 の問題を引き起こしている。戦

争という大規模な殺傷がしばし
 ば生じてきたのも、やはり神は
 たった一人の弱い人間をも慈し
 まれるという神の愛を本当に信
 じないことがその根底にある。
 悪の力が必ず滅ぼされる。こ
 の確信は旧約聖書から新約聖書
 にいたる聖書の内容の深いところ
 を一貫して流れている。

すでにこの詩において記され
 ていた喜びの世界、満たされる
 世界があるから、支配する場合
 にも王自身も神によって喜び歌
 うことがあるように。7節にあ
 るように、あなたへの祈りを口
 ずさんでとか、喜びうたうとい
 うことに口は使うべきなので、
 偽り語ることに使うべきでない。

どうが本来の口、言葉の働き
 が保たれますよにというものが
 賛美と偽りを非常に対照的に書
 かれていく。光に満ちた霊的な
 満たしを与えられたから、それ
 が周囲の人にも与えられるよう
 にと願う。だからこそ、それを
 妨げ壊そうとする力が滅ぼされ

るよにという強い願いがうま
 れてくる。このような悪の力そ
 のものが滅ぼされるよに、と
 いう強い願いは、キリストその
 ものが持つておられたことであ
 り、新約聖書の内容にも通じて
 いる。

パウロがいつも喜べ、いつも
 感謝せよ、いつも祈れとあるが、
 この詩を作った人の引き上げら
 れた境地は、まさにこういう段
 階になっていた。

：神によって、王は喜び祝い
 神によって誓う者は、神を讚美
 するようになる。というものは、
 偽って語る口は、必ず閉ざされ
 るからである。(*)

(*) 新共同訳は「誓いを立てた者は
 誇りますよに」であるが、この訳文
 をさっと読んでよくわかるという人は
 少ないと思われる。この部分は、次の
 英訳による。

But the king will rejoice in
 God; all who swear by God's
 name will praise him (NIV)
 (**) 原文のヘブル語では、「...とい
 うのは、なぜなら」を意味する接続詞が
 あり、英訳などはほとんどすべてその

意味を持つ for を入れて訳している。
 … for the mouths of liars
 shall be silenced. (NJB)

神の言葉の権威―夕拝の学
 びから (列王記上 20～21章)

この二つの章には、神の言葉に従うことと、御言葉に背くことがいかなる結果を招くかを記したものである。

20章の記述は、現代の私たちがキリストの教えを知っている私たちには、不可解で、何ら学ぶべきものがないように思われることが多いと思われる。

ここでは、イスラエルの王が、アラムという強国の力に屈して、持ち物全部を奪われるままにしようと考えた。しかし、家来たちは当然のことながら反対した。王は、そして家来たちの意見に従って、アラムの王に拒否の回答した。

しかし、アラムの軍は大軍をもってせめてきて、イスラエ

ルは風前のももしびとなった。そのとき、預言者が現れた。民たちが、危険をもちえりみず、王の家族や宝物がむざむざと奪われていくのに反対した。

そのために、神は恵みとしてアラムの大軍を追い払ってくださるという内容を知らされる。

そしてその言葉どおりに、神はアラムの全軍を追い払ってイスラエルは救われた。

敵軍が敗北したのは、神の力をあなどって、イスラエルの神は、山の神でしかない、平地を支配できないとした傲慢のゆえだった。

こうした驚くべき結果のゆえに、それらの背後には人間の力―王や武将の力でなく、神の力がなしたのだと知らされる。

神はこのことが目的である。私たちも、さまざまの困難やそこからの救いにおいて、医者や努力、両親、等々のおかげだけでなく、太陽や神の力の治癒力によるとせねばならない。

神の声に聞かないときには、必ず遅かれ早かれ裁きがある。信じないことがさばきである。

このような主たる内容のほか、いくつかの考えるべき言葉がある。

・アラムの王が言った言葉、「お前の金、銀、妻子たちもみなわたしのものだ」。脅迫に対して、イスラエルの王は、何ら反論できずに、そのとおりだと言った。

これは単なる脅しとそれに屈する弱い王のやりとりすぎないが、ここで言われたこと、お前の持ち物はみな自分のものだ、ということ、それは、おおげさでありえないように見えるが、歴史のなかでは、王や専制君主、領主が支配するとき、また強力な国が支配するときにはみなこのようにする。

そうしたすべての人間の支配や所有欲を超えたところで、神は言われる、お前たちのもっているものはすべて私のものだ、

と。
 万物を創造し、いまもそれを支配し、支えているのは神である。

その神がすべての力を与えたのがキリストである。それゆえに、キリストを与えられたものは、すべてを―物の本質的部分をもっていることになる。

例えば、自然の山々、それはだれかが所有している。しかしそれは本当は神のものである。神を知ったもの、キリストを与えられた者は、その力や美、静けさを汲み取り、その創造者である神を喜ぶことができる。

それはその自然の山々を霊的に持ったことになる。他人の庭の花々でも、それを愛し、その美を創造した神に感謝する心あればその花々を持ったことになる。その花の美しさの根源である神を心に持っているなら、そのように受けとることができる。聖書にもつぎのように記されている。

…心貧しき人は幸いなり、天の

国はその人たちのものだからである。(マタイ5の3)

天の国、神の国とは、すべてが備えられた国である。神のご支配の力が与えられるなら、そしてその霊的な世界であるから、その神の国が与えられるとは、すべてが与えられることを意味している。

またパウロも、「すべてはあなたの方のもの、世界も生も死も、いま起こっている言葉も、将来起こることも、いっさいはあなたの方のもの。」と述べている。(コリントの3章の21-22))

この章で繰り返されていること、「さまざまの事を起こしているのは、主であることを知る」列王記上20の13、28。私たちはさまざまの喜ばしいことだけでなく苦しいことも、悲しいことも、すべて主の御手のうちにあるということ

信じるようにと導かれている。自然の美しさも激しさも。

その当座は、どんな意味があるのかわからないが、私たちにわからない深い御計画をもつて神がなされているのだ、どのようなことも、きつと神の御計画において最終的には最善になるようになされているのだと信じる道が開かれている。

お知らせ

○1月6日〜8日に、横浜市の「上郷・森の家」で開催された冬季聖書集会(キリスト教独立伝道会主催)の録音CDがありますので、希望の方にお送りできます。

・MP3版 : 聖書講話と、それに関する感話、自己紹介等々が含まれています。価格300円(送料込)
・ふつうのCDラジカセでも

聞けるCD版:これは聖書講話だけで3枚のCDとなり、感話など含むと全部で7枚となります。これは1枚200円なので、聖書講話だけでは600円、感話など含む7枚では1400円です。

○今年のイースター特別集会は4月1日(日)です。
午前10時から午後2時まで。
徳島聖書キリスト集会にて。

○訂正 1月号
・1頁4段目 右より4行 未知道
・14頁4代目右より4行 善全

○多くの方々からのお祈り、協力費を感謝です。返信もできないうちも多いのですがおゆるしく下さい。

徳島聖書キリスト集会案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目一の47 徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分
(二) 夕拝 第一火曜と第三火曜。夜7時30分。 毎月第四火曜日の夕拝は移動夕拝。(場所は、徳島市国府町のちのさと作業所、吉野川市鴨島町の中山宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井宅の4箇所を毎月場所を変えて開催)です。

・水曜集会: 第二水曜日午後一時から集会場にて。北島集会: 板野郡北島町の戸川宅(第2、第4月曜日午後一時より。北島夕拝は第二水曜日夜七時三十分より)
・天宝堂集会: 徳島市応神町の天宝堂はり治療院(網野宅)、毎月第2金曜日午後8時。
・海陽集会、海部郡海陽町の讚美堂・数度宅(第二火曜日午前十時より)、
・いのちのさと集会: 徳島市国府町(毎月第一木曜日午後七時三十分より)、「いのちのさと」作業所)、・藍住集会: 第二月曜日の午前十時より板野郡藍住町の美容サロン・ルカ(笠原宅)、・小羊集会: 徳島市南島田町の鈴木八郎治療院にて。
毎月第一月曜午後3時。・つゆ草集会: 毎月第4日曜日午後一時半。徳島大学病院8階個室での集まり。・祈禱会が第一回金曜日午前10時30分。・第四土曜日の午後二時からの手話と植物、聖書

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇〇一五 小松島市中田町字西山九一の一四 電話・FAX 0885-32-3017 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)
郵便振替口座 〇一六三〇一五五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は、郵便振替口座が定額小為替、または普通為替で編集者あてに送って下さい。
(これは、いすれも郵便局で扱っています。) E-mail: pistis7y12@hotmail.com http://pistis.jp (検索は「徳島聖書キリスト集会」)